

木4 教育臨床心理学(前田基成) シケプリ

・シケプリ概要

過去のシケプリを参照したところ、この授業はテキスト・プリントともに充実しているためシケプリはレジユメの穴埋め用に作られることが多いようです。このシケプリも穴埋め・板書の確認に使っていただければと思います。レジユメに書いてある部分で再掲する必要が感じられない部分は省略してあります。各自でテキストや配布プリントを参照してください。誤りなど何かあったら教えてください。よろしくお願いします。

I 自分の心は自分が一番よくわかるか(イントロダクション)

1. 教育学と心理学

2. 心理学とはどのような学問か

・心理的リアクタンス理論

心理的リアクタンス…選択の自由が脅かされるような状況、場面では選択の自由を回復しようと強く動きつけられる状態のこと。

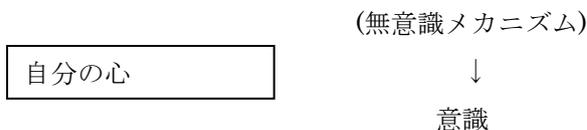
そのプロセスで失いそうな(奪われそうな)選択肢に関しては様々な魅力や好感度、高緯度が上昇し、その選択肢が選ばれやすくなる。

(例)・最終の新幹線発車前に抱き合うカップル

- ・ブレムの実験
- ・デパートの実演販売「限定〇〇個」
- ・憧れの先輩に告白するのは2月と3月が多い

内面的で自分で意識されるいわゆる「心」のはたらきには一定の法則性があるらしい。

重要なのは自分で意識される「心」のはたらきは「無自覚的・無意識的・自動的」に働くことだ。



3. 認知不協和の理論

認知不協和の理論…個人の内面に(心の中に)互いに矛盾する、相容れない2つの「認知」(= 思い、考え、信念)があるとき、「認知的不協和」と呼ばれる不快な緊張状態が起こる。それを解消ないし低減させるような心の働きが生じること。

(例)・フェスティンガーの実験

認知不協和の理論が示唆することは以下。

(1) 「自分の気持ちは自分が一番よくわかる」ということは案外正しくないのではないか。「自分の気持ち」「自分の心」と呼ばれるものは自分で意識されない、無自覚的な何らかの心理的メカニズム(心のはたらき)で決まるらしい。

(2) その心の働きは「人間は不安定な心理状態を嫌い、安定した状態を回復させよう」とする目的があるのかもしれない。

3. 教育における心理学の応用

人間の行動の法則性(心理メカニズム) → より適切な理解、より効果的な教育・指導へ
「理解」「診断」 → 「指導」「治療」

II 解離

1. フラストレーション

フラストレーション＝（欲求不満）とは自分の欲求の満足が阻止されたこと。心理的に（不快な緊張状態）

フラストレーション事態におかれると

- ① 合目的的行動…あくまでも欲求を満足させようと努力する
- ② 防衛機制…目的達成しようとはせず心理的不安定な状態を軽減しようとする
- ③ 非合目的的行動…自己破壊的、自暴自棄的な行為によって心理的不安定な状態から逃れること（例）死ねば楽になれるかも…

2. 防衛機制（テキスト P2～4）

…欲求不満や劣等感から自分を守り（防衛し）心理的な不安定を解消しようとする心理的なはたらきのこと。個人の心理に適応状態（心理的に安定した状態）をもたらすことから適応規制ともいう。

[種類]（具体例はテキストを参照してください）

補償…劣等感を感じると、自分が傷つかないように得意なことをさらに努力し有柄 t 間を感じるによって劣等感をカバーしようとする

（例）げんぞ一君。気が弱いという劣等感をこわもての生活指導の先生から人木置かれるという彼なりのやり方で得た優越感でカバー

反動形成…自分の心の中にあることと正反対の行動をとることで心の中の欲求が明らかになるのを防ごうとすること（例）好きな彼女にわざといやがらせをする

置き換え…欲求不満の対象をほかのものに置き換えること。

代償…自分を傷つけない、欲求を満足させやすい対象に目標を変えること。

昇華…社会的に許されない欲求を、社会的に認められる者に形を変えて満足すること。

合理化…自分の失敗や欠点を認めず、もっともらしい理由をつけて自分を正当化すること。

投射…自分の心にあるものを相手の心にもあると考えること。

逃避…欲求が満足できない場面、不愉快な場面から逃げること。

退行…以前の発達状態に逆戻りすること（幼児がえり）

同一視…他人の服装、動作、考え方などをまねることで、一体感を味わい満足すること。

・ 防衛機制にはプラスの側面とマイナスの側面がある

① プラスの側面（防衛機制が適応規制ともいわれる所以）

フラストレーションによって生じた心理的な不安定感を解消・軽減することができる。

② マイナスの側面

- ・ 非行・反社会的行動としてあらわれることもある。（げんぞ一君の例。補償、反動形成）
- ・ 精神的な成長を妨げることになりかねない（合理化）

防衛機制のやりかたによっては問題行動といわれることになりかねない。

3、いわゆる多重人格障害

自分とは「別の人」になってしまうと、嫌な記憶を思い出して不快になったり、苦痛になったり、不安になったりしなくて済む

4. 解離

解離…耐えられない記憶やそれに伴う一連の出来事を、現在の記憶を持つ意識と切り離し、それを思い出したり苦しんだりしなくて済むための心理的なはたらき。

・強いストレスを体験した人によくみられる。

(例)・葬儀で涙を見せずにあいさつ回りをする遺族…感情の麻痺

・性的暴力の被害者が警察に届けたとき感情の麻痺で淡々と話すものの事件の肝心な部分はよく覚えていない…解離性健忘

・プリントP7の症例で過去のいじめを思い出すと自分をカッターで傷つける

・過去の強度のストレスである心的外傷体験によって後々も精神的な後遺症が現れるのが心的外傷後ストレス障害 (PTSD)

5. 解離性障害テキストP8～

- ① 解離性同一障害＝多重人格
- ② 解離性健忘
- ③ 解離性遁走
- ④ 離人症性障害
- ⑤ 特定不能の解離性障害



心理的に不安定な状態から回避、低減できる
という点で共通

※解離も防衛機制と同じように不安定な心理状態から安定した心理状態を回復しようという無意図的な心理メカニズムであると考えられる

●解離の研究、催眠についてはレジュメ参照

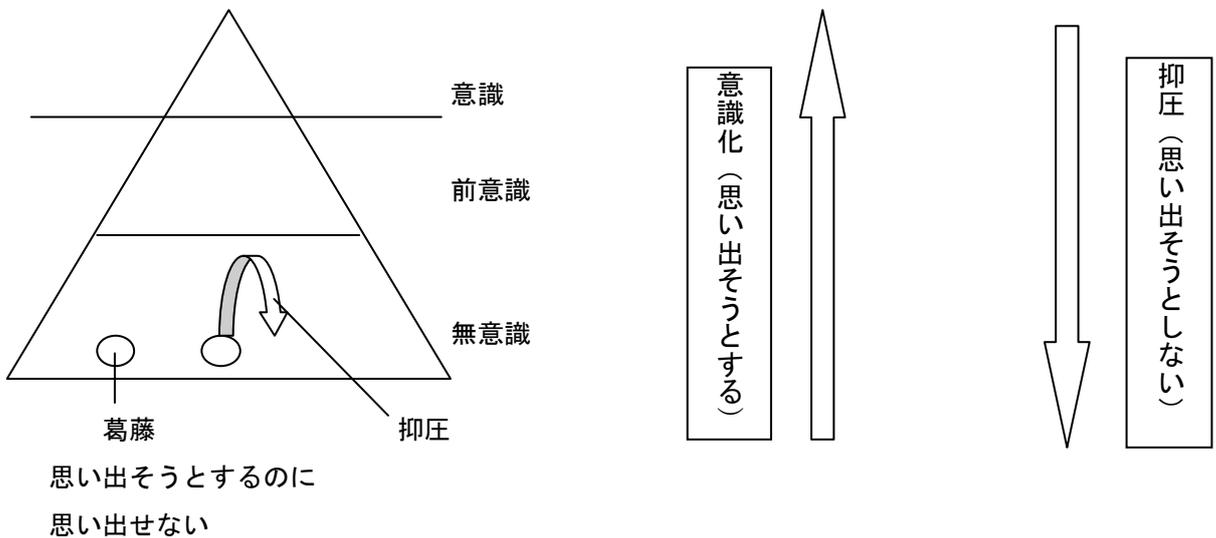
Ⅲ 精神分析理論

1. ヒステリー

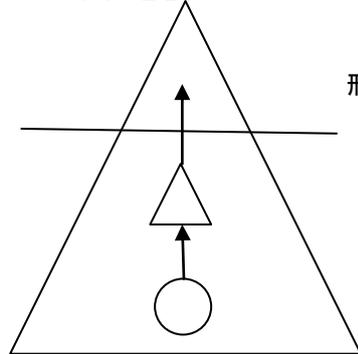
- ・ヒステリーとは→テキストP13～14参照
- ・ヒステリーの特徴
 - (1) 器質的な異常は全くない
 - (2) 症状が突然起こる
 - (3) ヒステリーになりやすいヒステリーの性格
 - (4) 何らかの疾病利得がある
 - 一次…心理的葛藤を意識の外に押しやり不安が減少
 - 二次…いやな義務・責任から回避、周囲からの注目・愛情を受ける
- ・現在の精神医学ではヒステリーという正式な診断名はない。
 - テキストP13 ジロウ君の例→身体表現性障害
 - プリントP11A 夫の精神的症状→解離性障害
 - とそれぞれ呼ばれる。

2. 意識・前意識・無意識 - 局所論

- ① 意識…今現在、意識されている領域
- ② 前意識…今現在意識されていないが、努力すれば意識化できる領域
- ③ 無意識…意識されない心の奥深くにある領域。



※フロイト 自由連想法



形を変えた葛藤を探して解釈 - 精神分析

←形を変えて意識化

- ・人は葛藤による心理的不安定を軽減するために、葛藤を抑圧する
- ・しかしひょんなことから葛藤について思い出しそうになると(意識化されそうになると)再び抑圧する
- ・すると抑圧され続けた葛藤は意識されても平気なように形を変えて現れる
例クレプトマニー、ヒステリーなど

3. 歪んだ性格の形成 - 発達論 テキスト P19 - 23

生物の定義 - 子孫を残すもの

精神分析理論における発達論の基礎にある、生物学的な考え方とは？

キーワードは「リビドー」

リビドー…生物である人間が個体を維持したり、朱を保存したりするのに役立つ精神的エネルギー。成長発達の過程で身体のどこかに顕著に表れる。どの部位にあらわれるかで P20 の表のように 5 つの発達段階に区分される

	リビドーが果たす生物学的な役割	問題が起こると… (テキスト P21 ~ 22 参照)
口唇期 (乳児期)	口唇にエネルギーを集中させて生き延びる	過度に甘えん坊で依存的な性格、指しゃぶり・爪かみなどの習癖、クレプトマニー
肛門期 (幼児期前期)	人間らしい生活 (排泄)	強迫性障害 (強迫神経症) - 几帳面、こだわり、潔癖などが特徴
エディプス期 (乳児期後期)	大人の性行為の練習 異性を好きになる (母など)、性器いじり	道徳性、性役割の形成がなされない
潜伏期 (児童期)	一時期リビドーは活動しなくなる	

性器期（成人期）	性的な興味関心を高め、子孫を残す	
----------	------------------	--

4. 性格の構造 - 構造論

・人間の性格はイド（快楽原則）、自我（現実原則）、超自我（超自我）の3つの構成要素の力関係で証明される。

・健全な性格とはイド、自我、超自我の3つの力関係のバランスがとれていることである。
バランスが崩れると…

イドが優勢→わがまま、自分勝手

超自我が優勢→「お堅い」「融通がきかない」

自我が優勢→情にかける、利にさとい

※プリント P15～P17 は各自読んでおいてください。

IV 初期経験と性格の形成

1. 生物としてのヒト

- ・初期経験とは人生初期の乳（幼）児期の経験のこと
- ・成長してから後の行動に大きな影響を及ぼすことがある（テキスト P34A 群(回避群)）

(1) 生理的早産

生物学者ポルトマン - 鳥類の就巢性と離巢性の分離概念を哺乳類に適用

分類	例	特徴	妊娠期間	一回の出産 で生まれる 子供の数	生まれてすぐの状態
就巢性 出生後しばらく自力で行動できない、自分の力で食物をとれない	ネズミ、ネコ、イヌ	脳の発達がわずか	短い	多い	毛が生えていない 目や耳の感覚器官が閉じられている
離巢性 出生後すぐに活発に動き回る、自力で母乳を吸いに行ける	サル、クジラ、ウマ	脳が大きく複雑	長い	通常一匹	よく発達を遂げる 感覚機能も運動機能もよく発達 体系は親の相似形

人間→テキスト P26

就巢性の特徴と離巢性の特徴を併せ持っている…人間が生理的早産ゆえに起こる矛盾

- ・人間の生後一か月の乳児は子宮外胎児と呼ばれる
- ・なぜ生理的早産になったかはテキスト P26 - 27

(2) インプリンティング テキスト P27 - 28…動物行動学者ローレンス

- ・離巢性の鳥類・哺乳類に見られるとされているが・・・

意味

- ① 子供の生存可能性を高める
- ② 種の保存のため

生物学的に備わっている仕組みで初期経験ともいえる

(インドクジャク (鳥類)、パンダ (哺乳類) の例)

～レジュメ参照～

自力移動ができない人間の乳児は生存可能性を高めるためにはどうすればいいか？

2. アタッチメント理論

- ・イギリスの小児精神科医ボウルビーが提唱
- ・生物学の成果を取り入れて、精神分析理論、特に発達論を発展させた。

(1) 愛着行動 テキスト P27~29

船が遭難して漂流している人は、遠くに船が通るのを見つけるとどうするか？
→手を振るなどの信号を送って助けを求める

・生理的早産となり自力移動できない人間の乳児は、進化の過程で生存可能性を高めるために、大人とコミュニケーションする能力を身に付けた。

(例1) ファンツの選好注視の実験

(例2) 3か月微笑の実験

(例3) 7か月微笑

意味：親にだけ愛想をふりまき他者には人見知りをして親に優越感を与える

以上より

・自分を「かわいい」「愛らしい」と思わせ、大人の養育行動を引き出そうとする。自分の生存可能性を高めるために、大人に養育させている。しかも次のような高等テクニックを使っている。

・3か月微笑→養育能力のない子供にはけして微笑まない。7か月頃になると親以外の大人に対しては微笑まない

※子供の視線をアイカメラで調べると

大人を見るとき：視線は顔全体をうろうろ動く。

子供を見るとき：目をずっと見ている。

(赤ちゃんはコミュニケーションの際に視線を合わせるのはあまり好きではない…らしい)

・注視・微笑み・泣く・ナン語などの、親を自分のほうに引き付ける信号を愛着行動という。

(2) アタッチメント

・乳児と母親との間に成立する心理的な結びつきのこと

・乳児からの愛着行動に母親が応答することを繰り返すことによって成立する

・アタッチメントの成立は安定した情緒や性格が形成される基礎となっている。したがってアタッチメントが形成されないと、不安定な情緒や歪んだ性格が形成されてしまう

(3) 内的ワーキングモデル

船が遭難して海を漂流している人が、船が通るのを見つけ手を振っても、どの船も気づかないらしくて行ってしまふことが繰り返されるとどうなるか？

① 無気力になる、無力感を感じる

② 疑い深くなる(船は見ても見ぬふりをしているのだろう、面倒に巻き込まれたくないのだろうと疑う)

～以下はテキストをよく読んでください～

・愛着行動には信号行動と接近行動がある P31

・基本的に運動機能が未発達な内から現われるのが信号行動で、運動機能が発達してから(ハイ

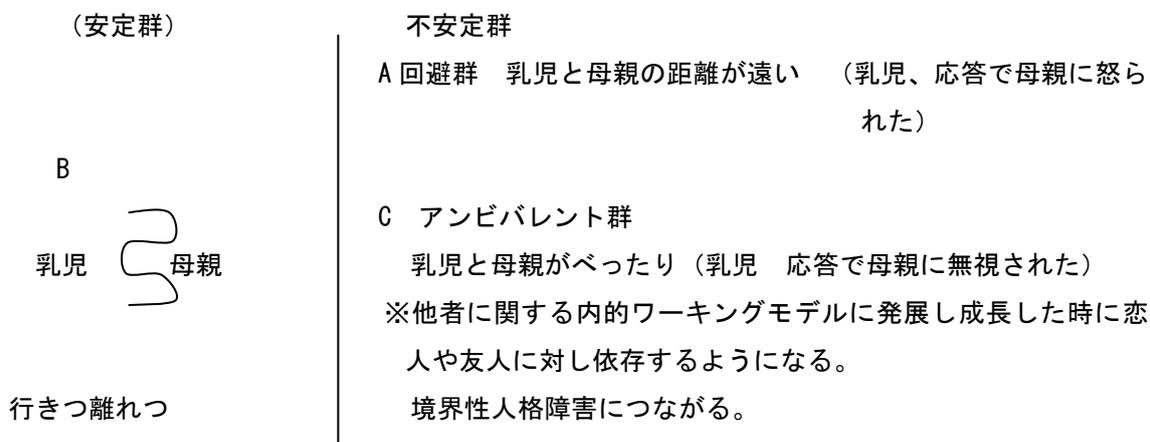
ハイができるくらい) 現われるのが接近行動

・ボウルビイは接近行動の個人差の背景には子供と母親との心理的な信頼関係(つまりアタッチメント)があるからではないかと考えた。

・そこで行われたのがストレンジシチュエーションという実験 P32~

・同じような実験状況で違いが生じるのはなぜか?

- ① 生後一年間に乳児から母親に対して発信された信号行動に対して母親がどのように応答したかに違いがあった
- ② そこから、「母親とはこういうものである」というイメージ(母親像)に個人差が見られるようになった
- ③ そのイメージの違いが実験場面での接近行動に表れた



・この母親像のことを、母親に関する内的ワーキングモデルという。

・乳幼児期における子供は母親との相互作用(相互交渉)とうして、このような母親に関する内的ワーキングモデルを形成する。

◎それが、「世の中とはこういうものだ」「他人とはこのようなものだ」というイメージ、すなわち他人に関する内的ワーキングモデルに発展する。

◎同時に、「自分とはこのような人間である」という自分に関する内的ワーキングモデルも形成される

・これらが成長した後性格となって現れる

4. アタッチメントと性格

キーワードは随伴性探知と自己効力感

・随伴性探知とは何か

随伴性に気づくこと

※随伴性…行動と結果のつながり、因果関係のこと

自分の行動→外部の環境をコントロール

・自己効力感とは何か

その行動をうまくできるかどうかという見通しあるいは予期（自身の程度）

（１） 積極的な性格か、消極的な性格か→他者に対する信頼感と関係

・アタッチメントが形成されていると

アタッチメントは乳児が発信した信号行動に対して、母親が適切に応答を繰り返すことによつて成立する。アタッチメントが成立しているということは、乳児が愛着行動を示した時に、母親がたいてい適切に行動してくれたということである。

そこから、他者に対する内的ワーキングモデルは

自分が困っているときには必ず誰かが助けしてくれる、従って新しい場面に出ていけるなにごとも前向きな性格になる

・アタッチメントが形成されていないと

乳児が信号行動を示しても母親が適切に応答してくれなかったということである。

したがって、他者に対するワーキングモデルは

困った時にも人は助けしてくれないということになり、消極的な性格になる。

（２） 自分に自信が持てるか、もてないか→自分に対する信頼感と関係

・アタッチメントが形成されていると

自分は母親の応答を引き出したということで、自分の能力に対して信頼感を持つことができる。

また、「自分は母親から養育される価値のある人間である」という自分に関するワーキングモデルが形成される。

したがって自分に対して肯定的な感情を持ち、自分に自信のある性格が形成される。

・アタッチメントが形成されて形成されていないと

母親の応答を引き出せなかったということで、自分の能力に対して不信感（←自己効力感が低い）をもってしまう。また、「自分は母親から養育される価値のない人間である」という自分に関するワーキングモデルが形成される。

したがって、自分に対して肯定的な感情が持てず、自分の自信のない性格が形成される。

V 虐待する親と虐待された子ども プリント P25～

1. 児童虐待 ※虐待：abuse 間違った使い方

(1) 被殴打児症候群

レジュメ参照

(2) 児童虐待

- ① 身体的虐待
- ② ネグレクト
- ③ 性的虐待
- ④ 心理的虐待

2. なぜ虐待するのか

(1) 行動の情動表出説 プリント P26～

人間は不満、怒りなどの不快な感情を経験すると攻撃的になる。特に欲求不満・攻撃仮説といって、自分の欲求が満たされない欲求不満（フラストレーション）の状況では攻撃的になりやすい。不快感情によって引き起こされた攻撃を衝動的攻撃という。

不快感情をもたらしたすべての欲求不満状況で攻撃的傾向が強くなるわけではなく、攻撃的傾向になるかどうかは欲求不満の原因による。

不合理な原因	他者の意図的な悪意、自己中心的動機、怠慢、過失	攻撃的傾向が強くなる
合理的な原因	事故、強制・社会的圧力、異状態、利他的動機、自業自得	攻撃的傾向が強くない

(2) 「完璧な親」を求める心理

「自分は完璧な親でなければならない」という（誤った）思い込み

…irrational belief 不合理な信念

↓

不適応行動を引き起こす

(3) 核家族化・世代間交流のなさ

[ABC図式] ←覚えてください！

場面 状況	→ 活発化	不合理な信念 B Belief system	→ 活発化	不適応行動 C Consequence
A Activate events				

3. 身体的虐待がもたらすもの

(1) 「悪い子」メッセージと見捨てられ不安

- ・「悪い子」メッセージとは、要するに親の身勝手な言い分
- ・しかし子供のほうは自尊感情の低下や見捨てられ不安をもたらす

(2) 境界性人格障害

境界性人格障害の心理的特徴

- ① 最高と最低を往復する。一気分と対人関係において顕著にみられる
- ② 不安定で激しい対人関係
- ③ 見捨てられ不安

その時々で自分にとって最も大事な人から見捨てられるのではないかと不安が常に存在

④ 自己破壊的行動

他者から見捨てられるのではないかと不安に取りつかれて、必死にしがみつこうとしたり、関心を引こうといた行動をとろうとする、そこで見られるのが自己破壊的行動

- ⑤ 自己否定感
- ⑥ アイデンティティー障害
- ⑦ 慢性的な不安全感

●アダルトチルドレン

「小さな大人」的な存在になる子どものことをアダルトチルドレンという

●役割逆転

アダルトチルドレンの形成過程は役割逆転という観点から説明できる。

親子関係の本質を「欲求を満たす役割」と「欲求を満たされる役割」という観点からとらえた場合、

通常の親子関係

親が子どもの「欲求を満たす役割」を果たし、子どもは「満たされる役割」を担う

虐待が生じる親子関係

子どもが親の「欲求を満たす役割」を果たし、親は子どもの存在や行動によって「満たされる役割」を担う

4. 虐待とPTSD

- ・虐待の体験は子どもにとって心的外傷体験になる P5～、P9～
- ・心的外傷体験の記憶は生々しい身体的感覚を伴う（P11をP9に訂正）
- ・このような外傷性の記憶何らかの刺激によって活性化されるとその場にふさわしくない激しい感情反応が引き起こされる。これが心的外傷後ストレス障害、略してPTSD

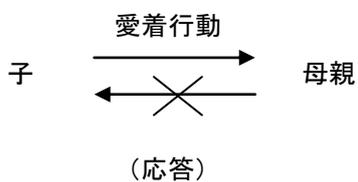
PTSDのおもな症状は以下（テキストP11の訂正：PTSDの診断基準の要点→PTSDのおもな症状）

- ① 再体験
- ② 解離
- ③ 覚醒の持続的な亢進

5. ネグレクトがもたらすもの

(1) 愛情遮断性症候群

・アタッチメント理論ではアタッチメントの形成不全と説明できる。かつての施設児に見られたホスピタリズムはその典型例である。



(2) ホスピタリズム

・かつての乳児院に見られた発達障害のこと。今はみられない。
・成人になっても、集中力がない、自己統制にかける、衝動的、科目、对人的無関心などの情緒的・对人的な歪みがみられることがあった。
・その結果、職場、家庭の人間関係がうまくいかず家庭が崩壊して、自分の子どもを施設に送ることになる施設2世もみられた。

(3) 施設2世

※新聞記事の解説

- ・広ちゃん、低栄養状態が引き起こした合併症による肺炎での死亡
- ・「悪いことしたからお父さんにたたいてもらった」…「悪い子」メッセージのあらわれ